

初めての出会い
ディアヴォロスとシェイル

教練入学式にて



天野 音色

aasru

その時、私は教練の四年だった。

最上級と成り、新入生を迎え入れる入学式の席に、多くのざわめく同学年に混じり、歩を進める。

毎年恒例の儀式をもう…二回過ごして来た。

新入生達を、上級生が品定めをする場。

それが、入学式だった。

新入生達は親族達と校門で別れ…自らを試す場。に足を踏み入れる。

将来。がここにはあった。

殆どの者が近衛に進む。

この絆はそのまま、近衛連隊での絆に繋がる。

誰が味方で敵か。

そして…誰と親交を深めるか。

最も…若い男ばかりのこの教練(王立騎士養成訓練校)でまだ体格の整っていない一年生(14才)達は、上級生にとってペットに出来る綺麗どころが居るかどうかの品定めの対象で、自分の眼鏡に叶う相手を見つければここで、不自由無く欲望を叶えられる。そう思っている輩がそれは大勢居たから、まだ少年の彼らの内その容姿の綺羅綺羅しい者等は、上級生達の争奪戦の的だった。

新入生達もそれは熟知していたし、その危険を避ける為、周囲の大人達はさぞかし…彼らを鍛え上げてここに、送り込んで来た事だろう…。

訓練校。とは名ばかりの、猛禽達の集う弱肉強食の場。

それを、叩き込まれて来たに違いない。

綺羅綺羅しい容貌の華奢な、ペットに出来そうな少年ばかりで無く、自分の脅威に成る
新入生も、人目を引いた。

ディアヴォロスが二年の時は、オーガスタスが。

自分同様黒髪一族で、王族であるグーデンをも上回る関心を、皆がオーガスタスに向
けた。

堂とした新入生離れした威風と、上級をも凌ぐ教練一の上背。

三年の時はグーデンの弟ディングレーが、兄とは似ても似つかぬ確かな存在感と同じ黒
髪一族が持つ内に秘めた激しさ、そしてどんな事にも屈せず意志を通す力強さ。を滲
ませ、周囲を圧倒した。

ディアヴォロスは欲求に対して今迄一度も不自由した事が無かったから、今年はどんな
大物が入学して来るか。それだけを楽しみに、広場に足を運んだ。

周囲が木々で囲まれた、広々とした校庭に全校生徒が集い始める。

年に一度の事だったが毎度異常な興奮が、そこにはあった。

皆それを面には出さず、儀式に参列してはいたが。

新入生の中で肝の小さい少年達は、見上げる程の上背があり、体格の立派な猛者達がご
ったがえすその場の異様な雰囲気、怯えていた。

去年もそれを目にして、ディアスは思った。

きっと優しい環境で育ったのだろう…。

気の弱い者はここでは猛禽の餌食となり、悲惨な体験を送る。

そうして…入学した数名は大抵、初学期…長く持っても中学期迄にはここを去らねばな

らぬ程、気を消耗していた。

が…幸いにして入学早々恒例の学年無差別、剣の練習試合で四年のアルフォロイスに打ち勝って以来、学校一の実力者だったアルフォロイスに目をかけられ、同学年で上級生に強迫まがいに關係を迫られて憔悴しきっている同級生の相談を持ちかけ、アルフォロイスからその強引な上級生らに注意を、入れて貰い事無きを得た。

アルフォロイスが卒業した後にはディアヴォロス自らが、年上の乱暴者らに相對し、意見を通した。

「左の王家」の身分と、今や学校一の上背と体格を、ディアスは持っていたから、彼の存在を煙たがるものの、面と向かって逆らう者は居ず、秩序は保たれていた。

が逆に三年に上がると意外と下の者達には目が行き届かず、一級下のオーガスタスが昔の自分と成り代わり、無体な輩と毎度、激しい喧嘩を繰り広げていた。

時にその相手は、オーガスタスと同学年で「左の王家」の血を持つグーデンの、体格のいい取り巻き達で、グーデンは身分に物を言わせてオーガスタスを処分しようとしたから毎度、ディングレーを介してグーデンを諫(いさ)めた。

ディングレーに伝言を頼み、出会った折りにジロリ。と視線をくべる。

それで…グーデンはオーガスタスの退校処分を毎度、諦めた。

…その年は、新入生が校門を潜り入って来た時から、上級生の皆が一人の少年にその視線を釘づけた。



銀の巻き毛を長く胸に流し、大きなエメラルド色の瞳をした、素晴らしい美少年。

体格も華奢で、なよやかな仕草で…だが皆の注目を浴びている事を意識するにつれ、戸惑う様子を見せて頻りに、隣の…やはりとても端正な、だが身分が高い。と一目で解る、気品ある彼より少し背の高い少年を覗う。

その貴公子のような気品ある少年は、美少年に見つめられるのに気づくと、顔を傾け優しく微笑む。

皆がその少年に対してひそひそと、言葉を交わし合う。

「北領地[シェンダー・ラーデン]大公子息のローランデ。

彼がそうだ…」

「地方大公の息子にしちゃ、えらく上品だな？」

都の宮廷貴族並に品がある」

「…だよな。

負けん気強く態度デカく言葉は悪く…大抵基本も出来てないめっちゃめっちゃな自己流剣技で、だが恐ろしく強い。

…それが地方大公子息の相場だからな」

「上品に見えても戦い始めれば違っただろう？」

「地方は礼儀もロクに知らない、野蛮な奴らばかりだ。

大公子息はその蛮族の長の子供だろう？」

「ああ見えてもきつと、剣を握ると猛獣だぜ？」

ディアヴォロスはその端正なたたずまいと、この大勢人が集う異常な興奮の場でも落ち着き払った、さほど体の大きく無い、上品な地方大公子息を見つめた。

澄んだ、青の瞳をしていたが、地方大公子息達が皆、その重責を知り尽くしているように彼も又、年の割に修羅に慣れた、冷静な瞳をしている。

だが隣の類い希な美少年に、とても優しい視線を向けている。

ディアス(ディアヴォロスの愛称)はその美少年を、見知っていた。

もっと昔…彼ははぐれた小鳥のように思い詰めた表情で、ディアスが好んで過ごす、田舎のコテージの扉に佇んでいた。

近所に休養に来て居た貴族の少年と一夜を過ごし、彼が帰るのを見送りに庭に、出向いた時気づいた。

「また…」

一夜を共にした少年は次を匂わせ微笑み、背を向け庭へと歩き出し、がその向こうの低い木戸に佇む、銀髪の美少年に気づき視線をその、美少年へと向けたからだった。

その美少年は、ふ…と視線を向ける、自分より少し年上の綺麗な少年の視線を受け、戸惑うように顔を伏せる。

一夜を過ごした少年は、ここに通って来るのは自分だけで無い。と知っていたから、自分の直ぐ後の約束の相手との出会いだ。と気づき、けれど顔を合わせた事は不快だと、振り向いて見送るディアスに、眉を寄せて示した。

ディアスは苦笑した。

『彼は、違う』

だが言わず、庭の木戸で無く別の出口に向かう背を見送る。

けれどまだ、胸ほどの高さの木戸に手を乗せたまま、開いたその中に歩を踏み出す様子すら無くその場に佇む、銀の髪の素晴らしい美貌の少年に視線を向ける。

途端、彼がその容貌の為、どれ程辛い思いをして来たのかが解って、胸が一瞬詰まる。

…直…その翼を折られ潰(つい)える、小鳥。そのものだった。

彼が、不安げな顔を上げた時、彼の背後にある強大な闇が見えて、ついディアスは彼に向かってその手を差し出した。

彼は一瞬弾かれるように顔を上げ…そして促されるように中へ歩を、ゆっくりと進めそして…外階段の木の手すりに手を乗せるディアスの元へと歩み寄り、数段高い場所に立つ彼を見上げた。

愛しい、大切な相手には決して、愛しては貰えない。

その絶望が、彼の大きな美しいエメラルド色の瞳を陰らせ、彼を闇に、引き摺り込もうとしていた。

闇は両手広げ、ずっと獲物と狙っていた可愛い少年を手に入れる事を、嬉々として喜ぶ。

そんな様が瞳に映り、ディアスは闇に怯え、が自分の運命に抗う力無く、自らを諦めの内に闇に引き渡そうと、静かな覚悟を決めた哀れな少年の…その手を、取った。

自分を見つめる、呆けた瞳。

まるで不思議な者を見るような…自分の知っていた、闇の強大な恐怖をも凌駕するような大きな存在感を微かに感じながら…その身をディアスに、委ねた。

彼を…光溢れる温室の、床にはめ込まれた寝台に横たえた時…その小鳥があまりに哀れで…腕に抱かない訳にはいかなかった。

彼は愛から、そして温もりからさえも、見放された。

そう絶望していたので。

温もりを…それも抱き合うだけでなく、もっと強い繋がりを…その類い希な美少年が求め、それが得られない自分は闇に飲まれても仕方無く…生きるに値しない。と迄思い詰めているのが、ひしひしと感じられ…。

繋ぎ止めるには自分がその役目を…するしか無かった。

抱き止める腕と胸がある。必要ならば必ずそれは、与えられる。

そう…彼に、示す為に。

彼にとっては初めての事だったから出来るだけ…優しくそして…深く繋がり会えるよう、抱いた。

ディアスにとってそれは…半死人に、命を呼び起こす作業に似ていた。

それ、一度切りだった。

ディアスは別れ際、彼にこう言った。

「いつでも…再び訪れて構わない」

そう……………。

少年は少し…感謝の瞳を投げ…その大きなエメラルドの瞳にほんの少し…生気が蘇ったのを見つけ、ディアスはどれ程ほっとしたか、知れやしなかった。

彼らは再び旅立ちその地を離れ…だが美少年は旅立つ前、やはり…低い木戸の前でコテージを見つめ…姿を現す自分に遠い視線を投げ、それを別れの挨拶に代えて背を向け…その儚げな姿を、ディアスの前から消し去った。

気にかからなかった。

と言えは嘘に成る。

時に彼はもうこの世には居ないのでは？

と不安に陥り、ワーキュラスに尋ねもした。

自分が抱いた事で彼に痕跡が残り、神の如く的能力を持つワーキュラスにとっては、簡単に彼を辿る事が出来て、毎度呟く。

“危ういが、生きています。

君は自分が人に及ぼす影響を、過小評価している”

ワーキュラスの言葉にはいつも真実が宿っていたが、その時の言葉はどうしても…言葉通りに受け取るのは難しかった。

…それ程彼は、儂げな美少年だったからだ。

だがその時目にした美少年は以前よりずっと…しっかりした様子でディアスは、ほっとした。

けれど彼は、あまりに周囲の視線が全部自分に集まり来るのに怯え始める。

そんな風にジロジロと、大勢の者達に無遠慮に見つめられるのに、慣れていない様子で困惑し…………。

自分がこれ程注目を集める事実に、狼狽え始めた。

新入生…そして上級生共にまだ、定められた配置に着かぬごった返す中が、彼を狙う者達にとっての、最大のアピールの場だった。

『その美少年は俺の物にする』

男達は互いに牽制を掛け、歩を進める者は強者達のみ。

互いに、相手を牽制する為には拳を振る事も厭わない。

ディアスの隣に居た二つ年下のいところ、ディングレーがその様子を目にし、眉間を寄せる。

彼に向かって進み出したのが、三年と二年でも有名な、乱暴者だと知って。



「…あの少年を、知っているのか？」

ディアヴォロスがディングレーに尋ねると、彼はささやく。

「三年の、ローフィスの義弟だ」

そして美少年は視線を彷徨わせ、義兄ローフィスの姿をその大勢の若い男達の中から探す。



「…まだ来てない…。

まずいな…」

ディングレーが美少年同様、首を振って群れ来る男達を眺め回し、呟く。

二年の猛者が先に、銀髪的美少年の前に立ち塞がる。
美少年はその大きな年上の青年にすっかり、怯えていた。

欲望を滾らせた瞳。
そして威圧。強制。

ディアスは無理も無い。と思いそして…美少年はその男に腕を掴まれ、咄嗟に振り払い、駆け出し大声で叫ぶ。

「…ローフィス！」

周囲を別の男達が…弱味につけ込むように立ち塞がり、彼を自分に抱き止めようと腕を伸ばす。

美少年は二度、三度と、捕まえようとする男達の腕を振り切り、駆けそして…二度(にたび)叫ぶ。

「ローフィス！」

哀れな声。

やっぱり…小鳥だ。力の弱い、とても小さな。
猛禽達に、喰われんばかりに囲まれた。

ディングレーが咄嗟に、歩を踏み出すその腕を握って制す。

「…君では殴り合いに成る」

「…だが！」

ディングレーが視線を彷徨わせ、必死で美少年が呼び求める主を捜す。

ほっ。としたように視線を、広場の入り口に見つけたが、あまりにも距離がある上、人並みでロクに前に、進む事も出来ない様子だった。

「…！やっぱり俺が……………！」

言った途端、視線を前に戻すとそこにはディアヴォロスの背が、美少年に向かって進み行くのをディングレーは見つけた。

ディアヴォロスが歩み出すと、周囲は彼に、道を開けた。
次々と、自然に…。

そして…美少年の背を追い彼の腕を掴もうとした猛者が、ディアスの姿を目に、一瞬目を見開き、その歩を、止めて固まる。

どん…！

美少年は前塞ぎ抱き留めようとする腕に抗う。

「大丈夫か…？」

咄嗟に見上げるが、その情欲を滾らせた猛禽の言葉に、美少年は表情曇らせそして…これを機にと抱きしめようとする腕に抗った。

があまりにも非力。

ディアスは自分に背向ける同学年の乱暴者の腕を、気づくと咄嗟に掴んでいだ。
捻る気は、無かった。

が乱暴者は鬪牙と憤怒滲ませ振り向いた。

自分に向けられた、驚愕に見開かれた眼(まなこ)

まさかそんな…！

この男がこんな場に、出て来る筈が…！

ディアスはそれで思い出していた。

彼ら猛禽達の、暗黙の規則を。

初めての場で獲物を掴んだ男が権利を有し、それに異議ある物が後、戦いを挑む。

乱暴者はこの美少年を自分が勝ち取ったと、確信していた。

が、今この学校でも最高の身分。

そして腕前持つディアヴォロスに譲れば、その権利さえ消え失せる。

乱暴者は一瞬、躊躇った。

ディアスはその瞬間、殺気を向ける。

その一瞬の一瞥(いちべつ)で十分だった。
乱暴者は項垂れてディアスから顔背ける。

その腕は力無くし小鳥を放し…それを見てディアスは男の腕を放した。
男が無言で去ったその場で、小鳥は…それでも顔を上げた。

自分を救い出してくれた相手をもっと、見ようと。
だからディアスは身を屈めた。
(彼はうんと、長身だったので)

美少年はその背の高い青年が、他の誰とも違う…崇高で厳しく、それでいて優しい気配
をしているのに思わず視線を、吸い付ける。

懐かしい…顔。

が、以前見知っていた時よりずっと…大人びて落ち着き払い、頼れるに十分な逞しさを
備えている事に胸ざわつかせ別の意味で落ち着きを無くし…だが、その崇高な、整いき
った美男の唇に、とても優しい微笑を見つけた時…美少年はすっかり、落ち着きを取り
戻す。

彼は決して自分を傷つけない。
むしろ…必要な物が何かを察して与えてくれる。
過去を思い出しそう…美少年は納得した様に俯く。
なぜなら身を持ってその事を、知っていたから……………。

ディアヴォロスの登場で、無遠慮に見つめる視線は次々と、引いていく。
この教練校のどの猛者も、ディアヴォロス相手に勝ち目は無いと、思い知っていた。

「シェイル！」
背後で声がし、美少年とは似ても似つかぬ、爽やかな風体の明るい栗毛を揺らした青年
が叫び途端、“シェイル”と呼ばれた美少年は、ディアヴォロスの背の向こうへ視線
向け、求める義兄の胸へと、弾ける様にディアスの横を駆け抜け、飛び込んだ。

「ローフィス！」

ローフィスは可憐な美少年を胸に抱き止め、自分より顔二つ分も背の高い、ディアヴォロスを見上げる。

背を向け、顔だけを振り向かせるその学校一の大物に、ローフィスはそっと告げた。義弟シェイルを胸に抱いたまま。

「…感謝する」

ディアヴォロスは零れるように微笑み、一つ、頷いた。

その美少年…シェイルは、義兄の言葉にそっ…と背後を振り向き、その背の高い黒髪的美青年を見つめ…やはり不思議そうなエメラルドの瞳を、向けた。

何か、言いたげな瞳だったが、学校の講師達が姿を現し、設えられた席に、着き始めるのに気づき、一つ、頷いてその場を後にする。

ディングレーが、ディアヴォロスに駆け寄りささやく。

「助かった！」

ディアスは年下のいところにそっ、と告げた。

「二年の列は、向かいだ」

ディングレーは途端、式が始まるのが直だ。と気づくと、年上のいところに背を、向ける。

「…人にあまり感心の無い君が、気にかけるとは、余程だな？」

背に投げかけられたその言葉に、ディングレーは瞬間察し、歩を止めて振り向き、叫ぶ。

「気にかかっているのは兄の方だ。」

あいつに、俺は恩がある！」

ディアスは頷く。

あの義兄ローフィスの様子だと…ずっと、あのか弱い小鳥を強い意志で護り続け…そしてその小鳥の全幅の信頼を彼は受け、裏切るまい。そう…固く決意している様が見受けられた。

だがディングレーは、考え浮かんだように顔を落とす。

「…シェイルを手に入れようとするんなら…ローフィスと対決する事に成るぞ？」

ディアスはその言葉で…あの小鳥の不安が解った。

ローフィスは兄で居ようと貫き通し…あの小鳥は、義兄が女性の手を取って自分から離れ行くのを、心から恐れたのだ。

身を投げ出してでも、義兄を自分に引き止めたい。

が……………。

兄で居続けよう。とするローフィスが、それを受け止める筈も無い。

打ち萎れた、哀れな小鳥。

姿は皆が見惚れる程美しいのに。

だがその美貌は彼にとって、呪いでしか、無い。

ディアヴォロスの一つ、吐息を吐いた。

あれ程可憐で無垢な弱々しげな小鳥なら、どの猛禽も狙わずにはられない。いずれ事を収めるのは自分しか居ない。

だとしても…。

願わくば、最愛の人を自分に捕らえる事叶わぬ、打ち拉がれた小鳥のその小さな胸をこれ以上、痛める事がない事を祈るばかりだ。

自分が周囲にその、決意を示せる場が訪れる、その時迄。

ワーキュラスが微笑んで、そっ…と告げた。

“たった一度、すれちがったような出会いなのに、そこ迄君の心を彼は、動かしたのか？”

ディアヴォロスは銀髪の、類稀な程美しい儂げな小鳥。を見た。

彼に、教えたかった。

確かに闇は存在する。

けれど同時に強烈な意思もが存在する。

“生きて、幸せにいつも微笑んでいてくれ”

その強い思いが彼を薄く、守っている。

強すぎる闇に対抗するには、薄すぎる光。

がそれでもその光は薄いながらも、決して消える事の無い程強い。

…闇がある。

が同時に、光もある。

そして人は選択出来る。

闇を選ぶか、それとも光を選ぶかを。

君が光を選べば必ず、光は君の力に成る。

最期の最期に君は知る。

自分が選んだものは君に応えたのだと。

暖かさと幸福の内に。

「あの義兄は光そのもので義弟を包んでいる。
…だからそれを教えるのが、多分私の役割だ」

そうディアスが呟くと、ワーキュラスはそれを聞きただ、くすくすと微笑った。

理由を尋ねても答えずただ、くすくすと、その神の如くの光の国の光竜は、微笑い続けてた……………。

ディアス自身ですら気づかぬ恋心に、この先囚われる運命等思いもせぬこの、時期(とき)に。

ただディアスは心弾んだ。

神(ワーキュラス)のその、密やかで軽快なくすくす微笑いに。

神のその微笑いはいつもディアスに、どきどきわくわく胸高鳴る体験をいつも、約束していたから。

-END-